

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：32686  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2019～2023  
課題番号：19K00200  
研究課題名（和文）15・16世紀の彩飾祈禱書におけるイメージの総合的研究：ネーデルラントを中心に  
  
研究課題名（英文）Realism, Vision and Spirituality: A Study of the Image in Netherlandish Illuminated Prayer Books of the 15th and 16th Centuries  
  
研究代表者  
黒岩 三恵 (Kuroiwa, Mie)  
  
立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授  
  
研究者番号：80422351  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：15・16世紀のネーデルラント彩飾写本の調査を行った。ブルゴーニュ公やロークロスター修道院所有の作例等に関し、写本の作品構造、注文主・読者による写本の使用、同時代の信仰と視覚、を主軸とする多面的な資料収集と最新の研究アプローチも援用して分析・考察し、信仰と美術の関係について仮説を提示した。彩飾写本と密接に関わる、実体変化の教義を背景として流行を見る奇跡の聖体や聖バルバラ図像と関連資料の調査を行った。前者は「奇跡の聖体」関連の美術を、後者は聖女バルバラ図像の成立の経緯を明らかにする目的でフランスにおける時系列的分布を調査・分析した。写本彩飾の背景となる当世の視覚性について新知見を得た。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

ブルゴーニュ公フィリップ善良所有の彩飾写本を中心に、新たな視点、研究方法を用いて考察を行った。ほぼ未研究のバイエルン州立図書館蔵『善良公のいと小さき祈禱書』が、著名なオランダ国立図書館蔵『善良公の時禱書』と挿絵、テキストともに相当の重複を含み、かつ祈禱文の後補や手指の皮脂汚れの状態から善良公の日常の祈禱行為の痕跡も含む重要な作例であることを解明した。  
また、聖体の実体変化の教義が当世の視覚性や視覚文化に与えた影響については、豊富な作例に反して研究が少ない1370年のブリュッセルの聖体冒瀆事件とその図像を複合的に分析し、当世の「霊的な視覚性」の実例として提示した。

研究成果の概要（英文）：This research project has made the following achievements: We collected data about Netherlandish manuscript illumination of the fifteenth and sixteenth centuries. Hitherto little-known manuscripts destined for the Duke Philippe the Good and those made at the Rooklooster Priory are among the data. Analyses of the manuscripts, the structure of the artwork/illumination, the use of manuscripts by the reader, and contemporary visual practices have led to interesting hypotheses.

We also researched topics about the relationship between manuscript illumination and the visual, material, or spiritual cultures that it depended on. To cast a new light on the act of "seeing", we researched a visual representation of Transubstantiation of the Host, the Brussels Miraculous Sacrament. We studied the foundation and dissemination of St. Barbara's veneration and iconography, a saint closely related to the dogma of the Trinity and the Host. New findings have led to a wider perspective on the visibility.

研究分野：美術史

キーワード：西洋美術史 中世美術 写本彩飾 ネーデルラント ブルゴーニュ公 聖体 聖バルバラ 視覚性

### 1. 研究開始当初の背景

平面性が保持されるテキスト欄と三次元的な彩飾の絵画表現が紙面に併存する写本は、頁を繰ることによる動的で連続的な表現も加味して、中世の長い歴史を通じ独自の視覚世界を形成してきた。活版印刷術の発明を一因として衰退を迎えるにいたる、15世紀から16世紀にかけての写本彩飾の歴史の最終局面について、絵画の様式・技法史やイメージとテキストの関係といった従来の研究手法に加えて、新たな視点から考察ができないか、という関心が本研究課題の出発点である。

15世紀から16世紀においては、欧州の中でもネーデルラント地域が写本彩飾の最終局面において重要な役割を果たした。これまで長年研究を続けてきたフランスの彩飾写本とも密接にかかわる同地域の写本彩飾について研究することは、フランス、ネーデルラント両地域の中世・ルネサンス美術研究にとっても意義深い。何よりも、ネーデルラント地域では、13世紀以降とみに神秘主義的な聖体信仰が隆盛する点が注目される。第4回ラテラノ公会議で制定された聖体の実体変化の教義が、聖別された聖体が字義どおり真のキリストの肉体である、と定めたことは、ルネサンスに至る自然主義的な眼差しと表現を育みつつあった西洋の美術とイメージ文化において新たな課題と挑戦となったと仮定することが可能である。独自の聖体信仰の他、ウィンドスハイムの共同生活兄弟団、ベギン会等の広範な宗教的運動が活発化したネーデルラント地域において、ブルゴーニュ公の宮廷や上層市民層を顧客とする、きわめて精緻な写実性を特徴とする彩飾写本が豊かに産出した。聖体図像にも注目しつつ同時代の霊的な活動を基盤・背景とする「霊的な視覚性」を解明することで、15・16世紀の写本彩飾を従来とは異なる視点から考えてみたい、というのが研究開始当初の背景である。

### 2. 研究の目的

本研究課題の目的は以下の三つに大別可能な課題と関わる。

(1) 対象とする15・16世紀のネーデルラント地域の彩飾写本について、美術史的な評価を行うことが第一の目的である。15世紀半ば以降、それまで写本彩飾において主導的な地位を謳歌していたフランスのパリから、ヴァロワ系ブルゴーニュ公の宮廷を一つの柱とする芸術庇護によって、ヴァランシエンヌ、ブリュッセル、アントワープ、ブリュージュなどネーデルラント各地へ写本彩飾の拠点が移動する。この過程を通じてフランコ=フラマン様式という複合的な名称を有していた彩飾の主流は、アントワープ=ブリュージュ派のようにローカルな固有性を持つに至る。比較的研究が手薄なこの過渡期の様態をより丁寧に検討することも目的の一つである。さらに、15世紀後半から16世紀初頭にかけての時期には、現代の視点では複合的なだまし絵とも呼びうる、複数の視点を同一平面上に併存させる意匠を凝らした彩飾デザインが展開する。こうした写本彩飾の展開の特性とは何かを明らかにすることも目的となる。

(2) 同時代の「霊的な視覚性」とは何であるのかについて、実情に照らし明らかにすることが目的である。特にネーデルラント地方で独自の発展を見たと考えられる聖体関連の図像と言説について調査することで新知見を獲得しながら、それらの知見を写本彩飾を中心とする美術史研究へ応用することの可能性を探ることが重視される。

(3) これらの二つの目的が統合したところ、写本彩飾の多様なデザインにどのように当代の視覚性が関わっているのか、あるいは写本挿絵中の図像解釈が、霊的視覚性によりどう説明しうるか、について仮説を提示することが最終的な目的となる。

### 3. 研究の方法

本研究課題では、以下の(1)に挙げる資料の調査・収集を行い、これらの資料を総合的に援用して(2)の考察を行った。

#### (1) 資料の調査・収集

##### 彩飾写本の調査

まず、以下の写本作例について、ブリュッセルおよびオックスフォードで実地調査を行った：フルネンダール修道院制作『オランダ語聖人伝』(MS 15087-90)、ロークロスター修道院制作オランダ語訳『黄金伝説』(MS 388)(以上、ブリュッセル、ベルギー王立図書館)、『ローマ使用式時祷書』(MS Buchanan e.18)、『パリ使用式時祷書』(MS Canon.Litur.123)、『ドミニコ会使用式時祷書』(MS Canon.Litur.108)(以上、オックスフォード大学ボードリアン図書館)。

次に、以下の写本作例については、インターネット上に公開されている写本データベースを利用してデータ収集を行った：ジャン・ミエロ訳編『古の哲学者たちの道徳論集』(MS fr.12441)(パリ、フランス国立図書館)、『フィリップ善良公の時祷書』(MS 76 F 2)(ハーグ、オランダ国立図書館)、『フィリップ善良公のいと小さき祈禱書』(Cod.Gall.40)(ミュンヘン、バイエルン州立図書館)、『エンヘルベルト・ファン・ナッサウの時祷書』(MS Douce 219-220)(ボードリアン図書館)。

##### 聖体信仰・聖体図像関連の資料の収集

以下の領域にわたる資料の収集を行った：

実体変化の教義に関連する二次資料の収集。13世紀に活動したりエージュの隠修女コルニヨンの福者コリアナの活動と聖体の祝日に関する二次資料の収集。聖体冒瀆事件すなわち「奇跡の聖体」の説話に関連する資料。特に1370年ブリュッセルで発生した聖体冒瀆事件に関連する資料として、同事件に関する歴史研究、ブリュッセルの「奇跡の聖体」が安置される現ブリュッセル大聖堂の歴史資料、同奇跡の聖体を主題とする複数の美術作品に関連する画像・文献資料の収集。

聖バルバラ図像に関連する資料収集。同聖人の聖人伝関連の文献の収集。聖バルバラ図像の作例の実態に関するデータや文献資料の収集。

そのほか、上記記載の彩飾写本関連のものを中心とする彩飾写本研究、視覚論研究等の二次文献を収集した。

#### (2) 分析と考察

上記(1)で収集した資料を基として、以下の研究方法による分析と考察を行った。

##### 彩飾写本の考察

特定の写本作例、特にフィリップ善良公が所有した写本に焦点を充て、写本学的な構成、テキスト内容、彩飾プログラム、後補のテキストや彩飾、さらには頁に残る皮脂汚れも分析の対象として、所有者がどのような点を重視して写本を注文し、日常生活の中で使用し(読み)、どのような点を不足と考へて後補を行わせたのか、といった問題から、彩飾による視覚的構造、テキストによる内容の構成、読者の関与を総合的に考察することを試みた。

##### 聖体信仰をめぐる考察

ミサにおける聖体奉挙から拝領に至る一連の儀式とは別の、より民間信仰との親和性が高い「奇跡の聖体」をめぐる伝承と図像は、一方で実体変化の教義が民間説話として結実したと考えられ、他方では民間の霊的感情を表象するものと捉えることができる。多くの美術作品の源泉となった1370年のブリュッセルの聖体冒瀆事件については、同事件に関する歴史的な二次資料、ブラバント公国のユダヤ人居住史、オランダ語圏における聖体を主題とする中世説話文学研究、冒瀆された聖体を聖遺物として安置するブリュッセル大聖堂の建築史、フィリップ善良公ら寄進者らの貢献、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン工房の画家らが関与する装飾を主体として、複眼的に聖体図像の成立と展開を分析した。

##### 聖バルバラ図像をめぐる考察

聖バルバラが注目されるのは、百年戦争期のフランスの政治に祖父、父同様に深くコミットしつつも、彼らとは対照的に芸術庇護の領域においてはフランス、特にパリの芸術からは離れ、自領のフランドルやブラバントの芸術家との関係を深めたフィリップ善良公が特別に崇敬した聖人だからである。祖父フィリップ豪胆公、父ジャン無畏公が聖バルバラを特に崇敬した形跡がないことも善良公が新たに聖バルバラ崇敬を採用した傍証となる。同時に複数ある聖バルバラ図像に、聖体をアトリビュートとして掲げている類型があることも、15世紀ネーデルラントにおける聖体を中核とする信仰と結びついた視覚文化の存在を示唆する。フランス文化庁が整備したフランス国内の文化遺産データベース検索に基づく聖バルバラ図像に検する知見、ネーデルラント地方ならびにドイツにおける聖バルバラ図像に関する先行研究、聖史劇脚本を含む西方教会圏全域の中世期に成立した聖バルバラ伝文学に関する先行研究等、複数の研究領域にわたる知見を援用して、15・16世紀のネーデルラント彩飾写本に現れる聖バルバラ図像の意義を複眼的に捉える考察を行った。

## 4. 研究成果

上記の研究方法によって、以下の研究成果を挙げることができた。

#### (1) 彩飾写本に関する研究成果

2020年は、フィリップ善良公の祈禱書写本の2点、『フィリップ善良公の時禱書』と『フィリップ善良公のいと小さき祈禱書』については、彩飾や記載テキストの点で関連する写本作例にも言及しながら、収録テキストと図像プログラムが相当重複する点について研究史上初めての指摘を行った。

2021年は、先行研究がほとんどない『フィリップ善良公のいと小さき祈禱書』について、そのテキストと彩飾プログラムを写本学、祈禱文テキストの特定、彩飾画家の同定と様式等の観点から総合的に分析した。特に、写本を通じて手指の皮脂による汚損が顕著であり、日常的に愛用されたと推察されることから、ネーデルラント彩飾写本研究において実験的な方法論を提唱しているK.M.ルディの写本の汚れに注目するアプローチを応用し、同祈禱書で特に汚れが顕著なのが、聖バルバラの請願祈禱文と挿絵のある頁の他、キリストの聖顔の挿絵の頁、善良公の祈禱する肖像の挿絵を含むミサの際の祈禱文を掲載する頁、後補の聖バルバラに突然死からの保護を請願する祈禱文の頁などに偏ることを指摘した。ここから、少なくとも善良公にとっては、祈禱文に添えられた挿絵画像を目にすることのほか、上記『フィリップ善良公の時禱書』における以上に聖バルバラへの日常的な祈禱が重要であったことが示唆され、皮脂汚れを写本分析に加味することの有効性が確認された。これを踏まえ、2023年には、書評として、ルディの最新の研究を紹介した。

#### (2) 聖バルバラ図像に関する研究成果

フィリップ善良公が深く崇敬した聖バルバラについて、フランスの文化遺産の研究を通じて興味深い知見を得ることができた。フランスの文化遺産を中心とする考察をまとめたのは、野心

的な善良公による聖バルバラ信仰が、フランスにおける同聖女の崇敬を意識的に継承するものなのかどうか確認する必要があるためである。フランス文化庁のイニシアティブにより整備された文化遺産データベースから、フランスの諸地域における聖バルバラ崇敬の時間的・地理的な分布が確認され、フランス王ら貴顕の財産目録からヴァロワ王家で聖バルバラ崇敬が低調だったことがうかがわれた。したがって善良公の聖バルバラ崇敬は自国領ブルゴーニュ公国の特にネーデルラント諸地方での聖人崇敬と結びつくことが示唆された。しかしフランス国内の文化遺産の分布状況と財産目録他文献資料からは、聖バルバラが別格の聖人として古くから盛んであった東ローマ帝国から、直接フランスに向けて聖バルバラ崇敬を働きかける動きがあったことも示唆されている。注目されるのが、15世紀にオスマン・トルコ帝国の西進によって滅亡の危機に瀕した帝国が、聖バルバラの聖遺物をヴァロワ王家に贈呈することで、十字軍結成を工作したと解釈可能な文献記録が確認できたことである。十字軍にも意欲を見せていたフィリップ善良公の聖バルバラ崇敬のより複合的な解釈や、キリスト教世界が直面していたよりグローバルな危機が聖バルバラ崇敬の隆盛が例示するような視覚文化や視覚性に影響を与えていた可能性もまた開かれた。以上の知見については、2022年に論文として刊行した。

### (3) 聖体に関わる研究成果

実体変化の教義によって、見かけは白色円形の薄いウェハースたる聖体がまさにキリストの肉体そのもの、という知覚と認識の間の「齟齬」が美術表現や見ることすなわち視覚性に及ぼした影響に関しては、以下の成果を得て、2022年に論文としてまとめた。実体変化の教義を実感せしめる各種の奇跡の聖体、本当の肉体のように血を滴らせたり、キリスト像を幻のように浮かび上がらせたりする聖体の説話は、左記の「齟齬」に対する民衆的な受容が結実したものと言える。1370年にブリュッセルで出来した聖体冒瀉事件は、ユダヤ人が盗み出した聖体を破損すると出血した、とする説話の類型に属する。ブリュッセル大聖堂には、16世紀以降に制作された同説話を典拠とする多数の美術作品が伝来する。ところで、ブリュッセル大聖堂の建築史、15世紀前半に活動した油彩画家たちの活動、初代のブラバント公ついでブルゴーニュ公の動向、教皇エウゲニウス4世以下教会の動向等を総合的に考察することを通じて、1370年以降15世紀前半においてブリュッセルの奇跡の聖体への崇敬の高まりとともに、現存しない初期の聖堂装飾の様相について明らかにすることができた。

以上のように、計画当初においては、15・16世紀という長期の写本彩飾史の様相を対象としたが、研究課題の実施による写本作例や各種資料の調査・収集の結果、予想していた以上にフィリップ善良公の治世と芸術庇護に集中することとなった。とりわけ、奇跡の聖体崇敬の推進と関連の美術庇護に代表される、民衆レベルから沸き起こったと考えられる霊的な心情とブルゴーニュ公ら芸術庇護者たちの反応の事例は、「霊的な視覚性」の深さと拡がりを実感させるものであった。国内外いずれも先行研究が少ないかかる事例について論文にまとめられたことの意義に加えて、将来の研究につながり得る新しい課題を複数得ることができたことも成果に数えられよう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 黒岩三恵	4. 巻 14
2. 論文標題 1370年ブリュッセルの聖体冒瀆事件 - 出血聖体崇敬、ユダヤ嫌悪とサント・ギュデュル参事会指導の装飾 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 83,100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 黒岩 三恵	4. 巻 14
2. 論文標題 聖バルバラ崇敬と図像(1) : フランスにおける聖女崇敬の成立と展開 (11世紀 ~ 16世紀)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことば・文化・コミュニケーション : 異文化コミュニケーション学部紀要 = Language, culture, and communication : journal of the College of Intercultural Communication	6. 最初と最後の頁 1,37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒岩三恵	4. 巻 13号
2. 論文標題 『フィリップ善良公のいと小さき祈祷書』 - 祈りと彩飾写本の相互作用に関する試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことば・文化・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 1, 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒岩三恵	4. 巻 12
2. 論文標題 フィリップ善良公の私的信仰 - ハーグ、ミュンヘン、パリの3写本にみるトマス・アクィナス祈祷文とイメージの関わり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことば・文化・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 1,26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 黒岩三恵	4. 巻 15
2. 論文標題 (新刊紹介) Kathryn M. Rudy, Touching Parchment: How Medieval Users Rubbed, Handled, and Kissed Their Manuscripts. Vol. I	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 204, 205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------